

米

軍が「5日で陥落できる」とした島を36日間守り抜いた人たちがいました。太平洋戦争屈指の激戦地「硫黄島」。後に米国からも名将とたたえられた栗林忠道中将が指揮する日本軍は、渴き、飢え、炎暑の三重苦に耐え、すさまじい持久戦を展開します。組織的な戦闘は昭和20年2月19日、沖繩戦が始まる3月26日まで行われました。米軍艦隊がひしめくように周囲を封鎖し、延べ4千機による猛烈な空襲がやまない中、



生還絶望の島で盾に

この硫黄島の戦いには福岡県出身者を中心とした独立歩兵312大隊と314大隊、中迫撃砲第2大隊の3百人は、米軍に包囲され、頂上に星条旗が掲げられた摺鉢山から脱出攻撃を計り、ほとんどが戦死。314大隊の一部は、ロス五輪馬術競技の金メダリスト西竹一中佐率いる戦車26連隊とともに地下洞窟陣地を固守しました。その314大隊の中に金田出身の桑野又治さんがいました。昨年

12月に父が眠る硫黄島を訪れた桑野軍治さん(金田)は、父の戦没地で「おやじ、迎えに来たよ」と呼びかけ、故郷の水をお供えしました。「父が赤紙を手に『俺が行かな、戦争はしまえんけん』とつぶやいた光景をはつきりと覚えていました。当時わたしは6歳、父は39歳でした。若くはない自分が徴兵されるほど戦局が危ういことは承知だったと思います。硫黄島では父に『俺の背中に乗って金田に帰ろう』と語りかけました。涙が出ましたよ。」

硫黄島で米軍の3分の1ほどの日本兵、約2万1千人が、日本本土への米軍上陸を遅らせる盾となりました。周囲2kmの小さな孤島に派遣された兵士2千の大半は30代、40代で、妻帯者も多くいました。望郷の思いの中、日本で1日も長く家族が安泰に暮らせることを願った福岡町出身の17人も、ここで尊い命を落としました。

【重要拠点硫黄島】

南方戦線と日本本土を結ぶ航空経路の重要な拠点だった硫黄島は、東京から1250km、東京とマリアナ諸島の間に位置します。この硫黄島陥落後は、米軍の飛行距離の短縮によって、日本本土への大規模な空襲が容易になり、国内の各都市はたちまち焼け野原になっていきます。

米軍は沖繩進攻を遅らされた硫黄島での苦戦を教訓に、沖繩戦では「鉄の暴風」と呼ばれる猛攻をしかけます。しかし米軍も、硫黄島と沖繩で玉砕するまで戦い抜いた日本軍に大きな損害と衝撃を受け、日本本土への上陸は米軍にも膨大な被害と犠牲が出ることを必然視します。やがてそのことは、原爆投下の一因にもつながっていきます。

当時、ニューヨークタイムズ紙の表紙を飾った「摺鉢山に星条旗を掲げる海兵隊員」の写真は、硫黄島での犠牲を悲観していた米国民を熱狂させた。↑は写真の因縁の切手、↓は米アーリントン国立共同墓地にある「合衆国海兵隊記念碑」(資料提供:石井頭勇氏)



↑奥が硫黄島南端にある摺鉢山。米軍の砲撃で山の形が変わったといわれている。(資料提供:石井頭勇氏)



↑桑野さんが父・又治さんに郷土の水を届かせた独立歩兵314隊指揮所跡の石碑。



父が硫黄島で戦った桑野軍治さん(金田)

郷土の17人も眠る壮絶な持久戦の孤島

硫黄島

もう生きて故郷の土は踏めないだろう… 孤立無援の島が敵をくいとどめた36日間。兵士たちはこの抵抗が、本土空襲と敵上陸を遅らせることを自覚していました。

長崎原爆の日、小倉方面に見た

8月9日、11時2分。今年も長崎の方向にむかって黙とうをささげた太田順之さん(上野)。この日をむかえると、15歳の夏に八幡で見た「あの機影」が脳裏に浮かびます…。

B29

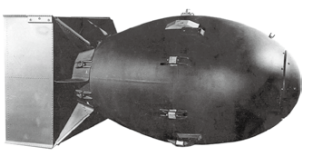
【当】時、福岡第一師範学校(前小倉師範学校)に通っていた太田順之さんは、学徒動員のため、八幡の松根油製造工場で働いていました。「松根油」とは、文字どおり、松の根株や枝を乾留して得る油のこと。太平洋戦争末期に航空機用ガソリンの欠乏に直面した日本が、石油の代替燃料にしようとした油でした。日本はそれほど物資に困窮していたのです。

「日本の戦況は悪く伝えられていなかったのですが、米軍の戦闘機特にB29は悠々と上空に飛んできて爆撃していました。応戦する日本製の戦闘機を見たことがなく、何で日本軍は敵機を攻撃しないのか」と不思議でなりません。わたしも何度か空襲に遭い、機銃掃射に狙われ、間髪もたずに命拾いしたこともありまし。

心につっかかっていたという太田さん。後日、米軍が長崎に落とした原爆の第一目標が小倉だったことを知り、思わず声を上げました。「驚きました。あのB29がそうだったのかと。長崎の人たちは自分たちの身代わりになって死んでいました。あの日、晴れていたならわたしも生きていなかったでしょう。」

あの日、もし晴れていたらわたしも生きてはいなかった。わたしも生きてはいなかった。

「日本の戦況は悪く伝えられていなかったのですが、米軍の戦闘機特にB29は悠々と上空に飛んできて爆撃していました。応戦する日本製の戦闘機を見たことがなく、何で日本軍は敵機を攻撃しないのか」と不思議でなりません。わたしも何度か空襲に遭い、機銃掃射に狙われ、間髪もたずに命拾いしたこともありまし。



長崎に投下された原爆「ファットマン」は、広島での原爆「リトルボーイ」の1.5倍の威力をもっていた。もし小倉に投下されていれば、平地のため、隣接する戸畑、若松、門司の一角と山口県下関にまで被害は広がり、死傷者は広島を上回っていたと推測されている。

「人ごとは思えない分、哀悼の気持ちも深くあります。原爆も戦争も、いかに自分の事としてとらえられるか。それが、戦争を知らない子どもたちに一番求められることだと思います。そう言い終えた後、太田さんは、わずかに空を見上げ、犠牲者を弔うかのよう、静かに手を合わせました。



北九州上空で旋回するB29を撃撃した太田順之さん(上野)